



写真：「YOSHIDA 祭」吉田中学校区(写真の説明は5ページ)



『放置しません』

指導主事 村山 貴芳

昨年11月、元野球選手・イチロー氏は、「昔は厳しい指導により、できない子をできるように指導していた。今は厳しい指導ができないから、自分で厳しくするしかない。これはなかなか大変なこと」という発言をし、自身を律することが求められる過酷さを指摘しました。それを受けたあるジャーナリストは、「厳しい大人は若者を一定のラインまで引き上げてくれることを保証してくれる人だった。かつて保証されていたことは、完全に自己責任になってしまった。自分を厳しくコントロールできない者は、そのまま放置される」という内容を配信しました。大人に叱ってもらえない、無責任だからやさしくなれる、と言うのです。

昨年度に改定された「生徒指導提要」では、＜させる生徒指導＞から＜支える生徒指導＞への転換が図られました。全ての子どもに指導・支援の手を差し伸べ、成長や発達の過程を支えていくことが求められています。

また、昨年度に公表された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒が、小中学校において推定値8.8%となり、全ての通常の学級に特別な教育的支援を必要とする児童生徒が在籍している可能性があることが明らかになりました。校内委員会を機能させるとともに、通常の学級における授業づくりの工夫改善に努めることが求められています。

教育の場に「そのまま放置」はあり得ません。これからも同様に、児童生徒一人一人の状況をしっかりと把握し、その子の成長や発達にとって必要な指導・支援を行っていきましょう。

ご協力ありがとうございました。

小中一貫教育

小中一貫教育取組評価アンケートの集計が終わりました。アンケート実施の際には、皆様からご協力をいただきありがとうございました。一部を紹介します。

「つながり」という視点から

十日町市の小中一貫教育では、市の学校教育のめあて、「ふるさと十日町市を愛し、自立して社会で生きる子ども」の実現を目指し、「つながり」という視点を大切にしています。その一環として異年齢や異校種間のつながりを重視し、各学校や中学校区で様々な交流活動を実施してきました。

ここ数年は新型コロナウイルス感染禍等で、交流活動を実施しにくい状況もありましたが、各中学校区で工夫しながら交流活動を継続してきました。右の2・12のグラフの通り、子どもたちの意識が大きく落ち込むこともなく、ほぼ小中一貫教育の目標値（グラフ中の破線）付近となっています。各中学校区の取組の成果だと考えています。

今後も各中学校で工夫しながら、交流活動の内容を充実していってほしいと思います。

「居心地のよい学級づくりをベースとした自己有用感を育む」という視点から

十日町市の小中一貫教育では、平成26年の完全実施の時から日々の授業から様々な学校行事等に至るまで「自己有用感を育む」視点を位置付けながら、教育活動を推進してきました。

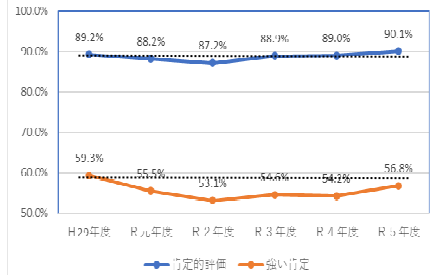
右の5・8のグラフのとおり、子どもたちの意識が少しずつ高くなっている様子がわかります。令和4年度から取り組んでいる「居心地のよい学級づくり」をベースとし、子どもたちの「自己有用感」が高まるよう、各学校や各中学校区で取組を進めてほしいと思います。

気になるデータ…「家庭学習」

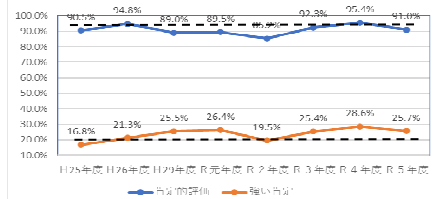
家庭学習に取り組む日数や時間の低下は、今回のアンケートの数値(9のグラフ)だけでなく、全国学力・学習状況調査(4ページ参照)でも、表れています。

家庭等で自ら学習する習慣は、既習事項を定着させるためだけではなく、仕事や趣味等を充実させるなど、自立した豊かな人生を送るためにも重要なスキルともいえます。これまでも、全ての中学校区で家庭学習の習慣づくりの取組を進めていただけていますが、令和6年度は各中学校区で家庭学習をどうとらえるか等を話題にし、取組を見直す年にしてほしいと思います。

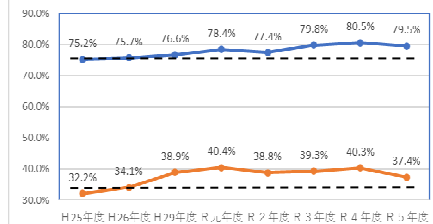
2 違う学校や違う学年との交流は楽しいと感じている子の割合 (小1～中3)



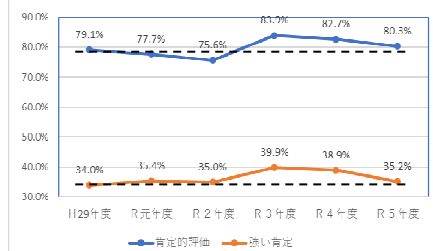
12 中学校進学を楽しみにしている子の割合 (小6)



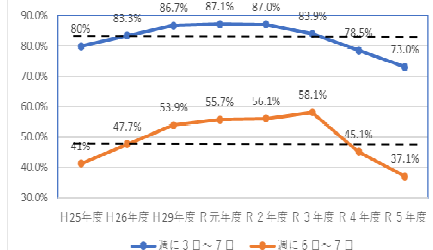
5 自分にはよいところがあると答えた子の割合 (小1～中3)



8 人の役に立つことができていると感じている子の割合 (小3～中3)



9 家で塾での学習をしている子の割合 (小6～中3) 1択(週に6～7日「3～5日」「1～2日」「全くしない」の4択のうち、青い線は「6～7日」と「3～5日」と答えた割合の和。オレンジ線は「6～7日」と答えた割合。)



※2・5・8・12のグラフは、「肯定的評価」…4択(「そう思う」「大体そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」のうち、「そう思う」と「大体そう思う」の割合の和。「強い肯定」…4択のうち「そう思う」と答えた割合。
※9のグラフは、1週間に「6～7日」「3～5日」「1～2日」「全くしない」の4択のうち、青い線は「6～7日」と「3～5日」と答えた割合の和。オレンジ線は「6～7日」と答えた割合。

教育相談班より

■ 不登校児童生徒への支援の在り方に対する基本的な考え方

文部科学省がこれまで発出した通知について、「学校に戻ることを前提としない方針を打ち出した」等の指摘があることから、誤解が生じないように、不登校の児童生徒への支援について改めて基本的な考え方が昨年11月に通知されました。（以下、抜粋）

1 令和元年10月25日付け通知について

「不登校児童生徒への支援の在り方について」（令和元年10月25日付け元文科初第698号文部科学省初等中等教育局長通知）では、不登校児童生徒への支援の視点として、

- ・ 不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること、
 - ・ 不登校の時期が休養等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益が存在することに留意すること、
- 等を示しつつ、その前提となる学校教育の意義・役割として、
- ・ 学校教育の役割は極めて大きく、学校教育の一層の充実を図るための取組が重要であること、
 - ・ 既存の学校教育になじめない児童生徒については、学校としてどのように受け入れていくかを検討し、なじめない要因の解消に努める必要があること、
- 等を示しているものである。

2 学校教育の意義及び在り方について

以上を踏まえ、学校及びその設置者においては、誰もが安心して学べる魅力ある学校づくりに取り組んでいただきたい。

その際には、児童生徒の学校生活のうち多くの時間を占め、学校における教育活動の中心となる授業を魅力あるものにしていくことが重要である。

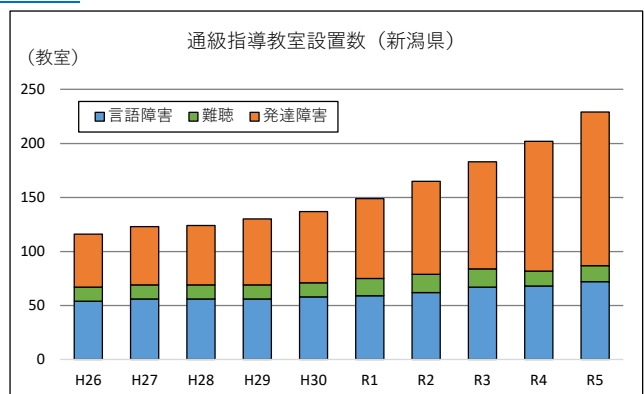
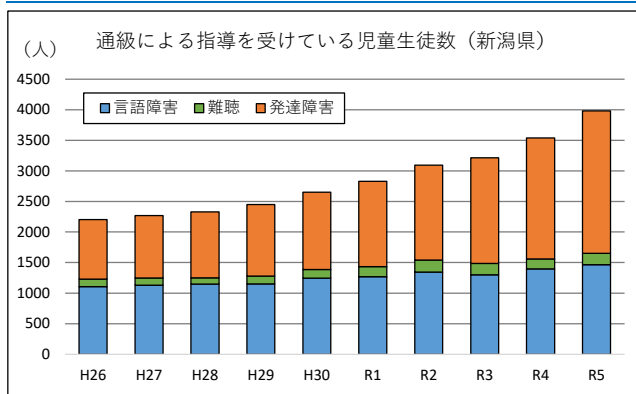
不登校児童生徒の社会的自立のため、当該児童生徒が適切な指導や支援が受けられるようにしなければなりません。教室に入れない児童生徒には校内適応指導教室等の別室を活用した学習の継続に、学校に登校できない児童生徒には市適応指導教室や民間施設と連携した支援に取り組むとともに、関係機関と連携して在籍児童生徒の心身の健康状況・学習状況等を把握し、必要な支援を行うことが重要です。



■ 通級による指導の効果を通常の学級に！

近年通級による指導を受けている児童生徒数は増加しており、通級指導教室の設置数も増加しています（下記グラフ参照）。十日町市においても同様であり、近年通級指導教室の新設を計画的に行っているところです。

通級による指導の時間は大変重要ですが、通級による指導が効果的に行われるようにするためには、在籍する通常の学級担任等と通級による指導の担当教員とが随時、学習の進捗状況等について情報交換を行うとともに、通級による指導の効果が通常の学級においても波及することを目指していくことが重要です。



学習指導班より

「居心地のよい学級づくり」と「家庭学習」について

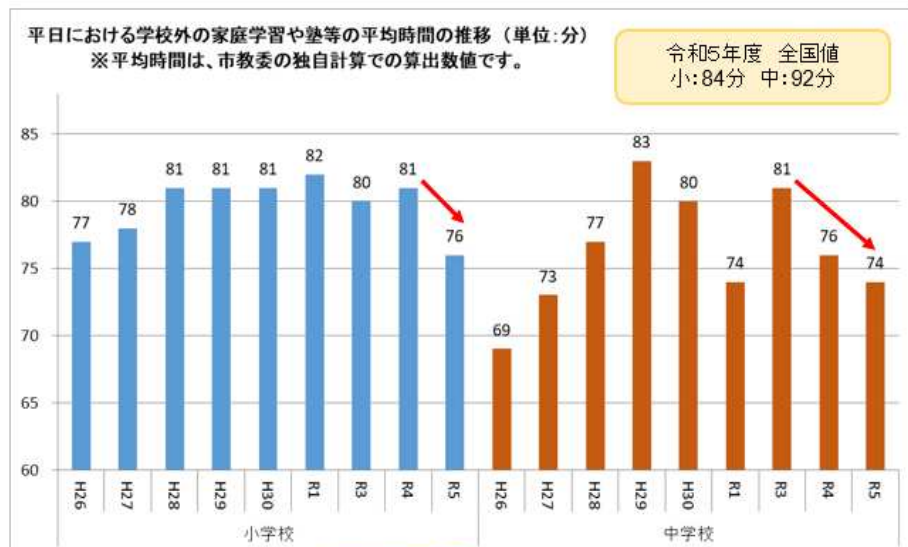
十日町市の家庭学習時間は、右のグラフのように全国と比較すると少ない傾向にあります（全校学力・学習状況調査より）。

特に、この3年間での低下傾向は顕著です。

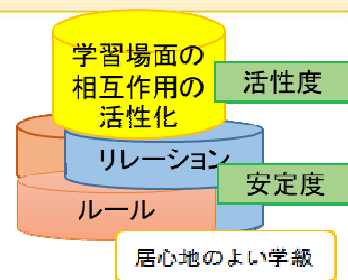
居心地のよい学級づくりでは、学習場面の相互作用の活性化、いわゆる「主体的・対話的で深い学びのある授業」をポ

イントにしています。相互作用を活性化させるためには、児童生徒が学習内容をしっかりと理解し、確かな知識を身に付けることが大切です。その一つの方策として、家庭学習は重要です。

全国学力学習状況調査の結果では、家庭学習時間が多い児童生徒や計画的に家庭学習に取り組んでいる児童生徒の方が各教科の正答率が高いという傾向が示されています。今までも各中学校校区で家庭学習の取組がなされておりますが、家庭学習の質や量、家庭学習の意味、具体的な方策について、総合的に再度見直し、少しずつ工夫改善を加えていきましょう！



グラフは、児童生徒質問紙の回答から平均的な家庭学習時間を算出したものである。
小学校では、平成26年度以降最も少ない時間、中学校では少しずつ時間が少なくなっている。
全国と比較しても、家庭学習時間は少ない。



< 学級仕舞いに向けて >

今の学年・学級での活動も残すところわずかになってきました。WEBQU3回目はありませんが、先生方の見立てでは「学級がまとまってきたな」「居心地がよさそうだな」と感じられる場面も多くなってきたのではないのでしょうか。さて、児童生徒にとって、最大の節目がやってきます。学級が変わる、変わらないはありますが、どの児童生徒も、今の学年や学級が終わってしまう寂しさを感じるはず。学年や学級との別れを惜しむほど「居心地のよい学級」だったと思えることは、貴重な経験です。

しかし、大切なことは、自己の成長を自覚し自信と目標をもって、次のステップへ進むことです。今までの活動と自己の成長を振り返りながら、しっかりと今の学年や学級とお別れする学級仕舞いを工夫してください。学級仕舞いが、新たな学級を親和型に導くスタートとなるよう児童生徒にとって最高となるエンディングを迎えましょう。

【表紙写真の説明】

「YOSHIDA祭」

始まりは、子どもたちの「地域と一緒に何かできないか」という純粋な気持ちからでした。昨年度、吉田中3年生の発案を学校と地域が協働してゼロから創り上げ「かたち」にし、休日に行いました。本年度は、吉田公民館、地域支援員の全面的な協力を得て、ブラッシュアップを果たし、10月15日（日）を授業日にして開催しました。

ミッションを、

- ① 地域の一員として、「地域を活性化・盛り上げる活動」を地域の方々とともに創り上げ、根付かせていくことで、魅力ある地域づくりを目指す。（郷土愛）
- ② SDGsの視点から活動を考え、実践し、持続可能な社会づくりに貢献する。（未来を切り拓く力）
- ③ 活動の計画、運営の経験を通して、人とつながるコミュニケーション力や、見通しをもって計画や準備を進め、実践する力を高める。（やり抜く力、かかわる力）

の3つに定め、取り組みました。

当日のプログラムは、チラシをご覧ください。

来場者数 453 名（吉田地域 235 名（中学校区小学生含む）、十日町市内 171 名、十日町市外 47 名）

